

オーガスタの まなざし



主教 小林 尚明

『カンダベリー大聖堂 新任主教研修』

2月1日(金)～11日(月)

まで、英国南東部カンタベリーで行われた研修会に参加してきました。世界17か国から29名の新任主教(1名被選主教)たちが集まりました。昨年6月にフィリピンの主教按手式に参列しましたが、その時お会いした2人の主教さんたちも参加していました。

宿泊・食事は、大聖堂の境内にあるロッジが充てられていました。研修は、ロッジの横にある研修センターです。日々の礼拝は大聖堂の礼拝に出席する形で行われました。

9人の講師から14セッションのお話を聞きました。

講師は、リーダーシップの専門家や大聖堂の聖歌隊の指揮者(プリセンター)、アングリカンコミュニオン的一致や、信仰と職制、神学教育の各担当者、カンタベリー教区のドーバー地区主教やポツワナの退職主教

様達でした。

なかなか英語が難しかったのですが、何を学んだかといいますが、主教の役割という事です。その中心は教えることです。教役者に教役者としての姿勢を教えないければなりません。それは一度教えればそれでいいというものではなく、継続的に教え続けなければならぬ事です。そのためにも、様々な研修も必要でしょう。

また信徒の皆さんへのイエス様の弟子としての養成が大切なこととして教えられていました。復活されたイエス様は、「すべての民をわたしの弟子にしなさい(マタイ28・19)」と命じられています。イエス様の弟子として、信徒は、何を神様から期待されているかを主教は十分に教えないければならないという事です。

各教会では、聖書の学びや大齋節、降臨節の講話、黙想会が行われています。それらのテーマは、大齋節の過ごし方とか信仰生活の充実のようなものではないでしょうか。それらのことも大切ですが、イエス様の弟子として、私はどう生きなければならぬか、という根本的な姿勢の学びが足りないのではないかと、という気づきです。

日本に帰ってから、2016年4月に行われた第16

回全聖公会中央協議会の決議文(管区事務所ホームページに掲載)を確認しましたが、その決議の第一は「弟子養成」です。そこには、弟子養成の学びが、「イエス・キリストの新たな弟子を得るために、全教会にとって有効に働くことを認識している」と述べられています。

(神戸教区主教)



下関聖フランシス・ザビエル教

山口県西部、本州最西端の下関は本州と九州、大陸や半島を結ぶ交通の要所であり、1893年(明治26年)には大阪に次ぎ日本銀行の支店が置かれ、また1901年(明治34年)には英国領事館が設置されるなど、まさに外交・経済・交通の要所として発展しました。

聖公会の下関伝道は1902年(明治35年)、英国領事館付の司祭(チャブレン)として派遣されたガーデナー司祭に

よって開始されました。1907年(明治40年)ガーデナー司祭は任務を終えて帰国し、その後は神戸や九州地方部の聖職によって伝道・牧会が行われました。しかし事情により下関の教会は門司と合同しました。

1926年(大正14年)春、神戸教区第二教区主教バジル・シンプソン神父のもと、松陰女学院(神戸市)で教師をされていた宣教師ミス・ケニオンが志願して下関に拠点を設け組織的な伝道を再開しました。1928年(昭和3年)、最初の牧師となるG.N. ストロング司祭(英国人)が派遣され、丸山町に「小さな家の教会」を置きました。

ストロング司祭の働きにより教会は大きく成長し、1930年(昭和5年)に現在地を購入し移転しました。この時、バジル主教によって日本の聖人である聖フランシス・ザビエルの名を戴き教会名としました。

太平洋戦争の最中、ストロング司祭は8ヶ月の抑留後に母国送還。その後は秋田温人司祭、中村弘司祭、角瀬史和司祭、長門一二三司祭らが赴任し教会を守りました。1981年(昭和56年)礼拝



堂と会館・牧師室を一体化した施設を建築。この年の8月に中道淑夫主教の司式によって現在の礼拝堂が聖別されました。



2002年(平成14年)、隣接地の土地建物を取得し、教会会館として使用を開始。2013年(平成25年)からは、地域のサークル活動や研修会、黙想会で利用が可能な「下関祈りの家」として運用しています。

(同教会ホームページより)